

# 伊吹山花だより

第62号 (令和4年8月)

上野区：ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

盛夏、水分忘れず、のんびり花巡りを。

コロナなど先の見えない不透明な日々が続きますが、伊吹山は皆様のご来山を多くの花々とともに待っています。現在は三合目や頂上の獣害防止ネット内の限られたエリアだけですが、もっと広げたいです。

三合目で待ってます。



ルリドラノオ  
(瑠璃虎の尾)

和名は花色が瑠璃色で、穂が虎の尾に似るから。伊吹山の特産種。瑠璃は、仏具の七宝の宝石の1つ。茎は直立し、茎の先に穂になった長い花序を作り、多数の花を密につけ、花は下から上へ咲き上がる。

涼風のルリドラノオが  
揺ら揺ら揺ら揺ら揺ら揺ら



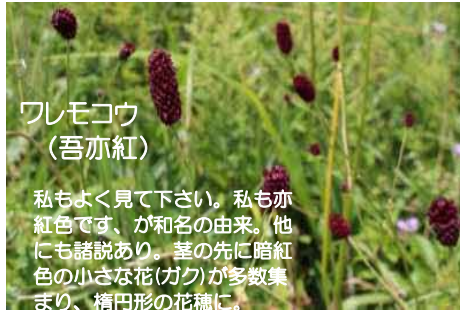
キセワタ  
(着綿)

花冠の外側が綿を被ったように白い毛で覆われている様子が和名の由来。花は数個ずつ段になり、花冠は淡紅色。茎は長く直立。



コオニギリ  
(小鬼百合)

和名は草姿がオオニギリより小型なので。若い蕾は上を向くが、段々下向きに開きひどく反り返り、内側には紫色の斑点がある。ムカゴはない。



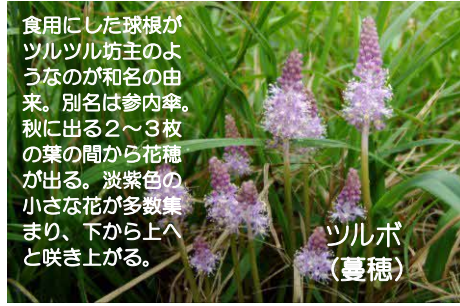
ワレモコウ  
(吾亦紅)

私もよく見て下さい。私も亦紅色です、が和名の由来。他にも諸説あり。茎の先に暗紅色の小さな花(ガク)が多数集まり、楕円形の花穂に。



思い草薄の傍でホッと咲き  
俯いたまま無邪気に笑う  
オオナンバンギセル  
(大南蛮煙管)

ススキ等の根に寄生する。無葉緑の鱗片状に退化した葉の元に、萼片が舟形で花冠は紅紫色のやや2唇形。マドロスパイプに似た花の形が和名の由来。



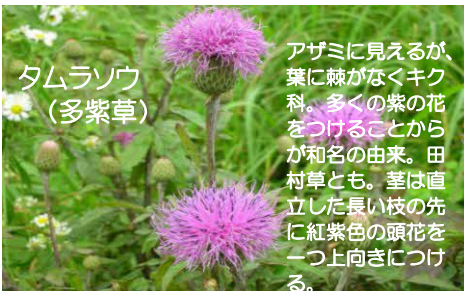
ツルボ  
(蔓穂)

食用にした球根がツルツル坊主のようなのが和名の由来。別名は参内傘。秋に出る2~3枚の葉の間から花穂が出る。淡紫色の小さな花が多数集まり、下から上へと咲き上がる。



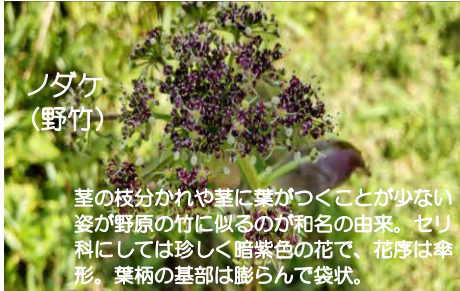
オトコエシ  
(男郎花)

草原のオミナエシ(秋の七草)に比べ、葉はやや質が厚く長さ3~15cmで、裂片の幅広。花冠は白色で多数集まって平らな花序となる。醤油が腐った様な匂いと白い大きな草姿でこの和名に。



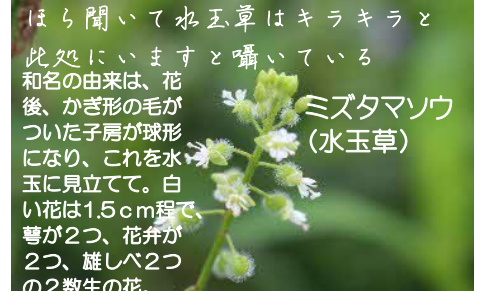
タムラソウ  
(多紫草)

アザミに見えるが、葉に棘がなくキク科。多くの紫の花をつけることから和名の由来。田村草とも。茎は直立した長い枝の先に紅紫色の頭花を一つ上向きにつける。



ノダケ  
(野竹)

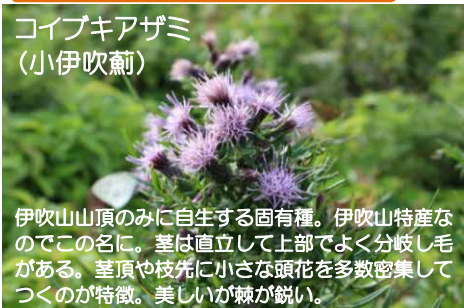
茎の枝分かれや茎に葉がつくことが少ない姿が野原の竹に似るのが和名の由来。セリ科にしては珍しく暗紫色の花で、花序は傘形。葉柄の基部は膨らんで袋状。



ミスタマソウ  
(水玉草)

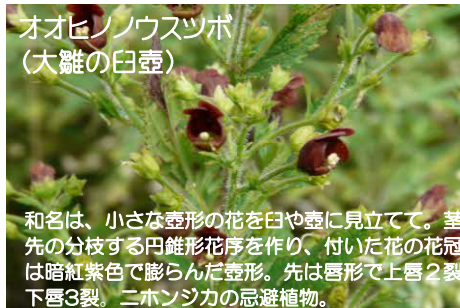
ほら聞いて水玉草はキラキラと  
此処にいますと囁いている  
和名の由来は、花後、かき形の毛がついた子房が球形になり、これを水玉に見立てて。白い花は1.5cm程で、萼が2つ、花弁が2つ、雄しべ2つの2数生の花。

山頂辺りで迎えてくれます。



コイブキアザミ  
(小伊吹薊)

伊吹山山頂のみに自生する固有種。伊吹山特産なのでこの名に。茎は直立して上部でよく分岐し毛がある。茎頂や枝先に小さな頭花を多数密集してつのが特徴。美しいが棘が鋭い。



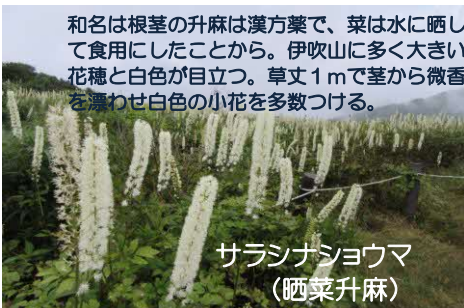
オオヒノノウスツボ  
(大雛の臼壺)

和名は、小さな壺形の花を臼や壺に見立てて。茎先の分枝する円錐形花序を作り、付いた花の花冠は暗紅紫色で膨らんだ壺形。先は唇形で上唇2裂下唇3裂。ニホンシカの忌避植物。



キオン  
(黄苑)

秋咲きのシオン(紫苑)の草姿(葉の形)に似て、花色が黄色なのが和名の由来。花は赤味の強い個体で、葉のペリに浅い鋸歯がある。シカの忌避植物。



サラシナショウマ  
(晒菜升麻)

和名は根茎の升麻は漢方薬で、葉は水に晒して食用にしたことから。伊吹山に多く大きい花穂と白色が目立つ。草丈1mで茎から微香を漂わせ白色の小花を多数つける。



メタカラコウ(雌宝香)

和名は、オタカラコウより小さく、根茎がタカラコウ(龍腦香)と同様な香りがするから。舌状花は、オタカラコウは8枚ほどで、こちらは1~3枚と少ない。長い茎に黄花を多数つける。



クサボタン  
(草牡丹)

和名は全体が草に見え、葉がボタンの葉に似るから。山地自生の落葉灌木。茎の先端部や葉腋部に円錐花穂で多数の紫色花を下向きにつける。



# 伊吹山を彩るフウロの仲間たちをご紹介します！ それぞれ特徴のある花たちです。

フウロ（風露）の名を持つ花は伊吹山に次の6種があり、ゲンノショウコもフウロの仲間。6月から山頂辺りでゲンナイフウロが咲き始め、ハクサンフウロは9月でも3合目で元気一杯。ただ、残念ながら獣害防止ネットの内側だけで見られます。



**ハクサンフウロ（白山風露）**  
北方系要素の多年草で伊吹山が分布の西南限とされる。開花当初、花粉が出ている間は柱頭を閉じ、花粉が終わった後に柱頭が外側に展開し自家受精を防ぐ工夫も。茎や蕾がほぼ無毛。



**エソフウロ（蝦夷風露）**

ハクサンフウロに似る萼片に開出粗毛を密生する。花弁が僅かに重なる。

エソフウロの仲間では花びらの外周が山形に切れ込む。萼片には毛が目立つ。



**ゲンナイフウロ（郡内風露）**

全体に大型で開出粗毛がある。郡内は山梨県東部桂川流域の地方名。伊吹山が分布の南限。



**ミツハフウロ（三つ葉風露）**

花はやや小さく、3深裂した葉をミツバに例えた。節がふくれフシダカフウロとも。



**ヒメフウロ（姫風露）**

花は小さく花びらに赤い筋がある。石灰岩地を好み、塩を焼く独特の臭気があり塩焼草とも。



**ゲンノショウコ（現の証）**

トクダミ、センブリとともに三大民間薬の一つの胃腸薬。白花は東日本、淡紅は西日本、紅色は日本海側に分布。花後の実が神輿に似てのて神輿花とも。



**ゲンノショウコ（美）**

## 6月の植物観察会。たくさんのお花たちがお出迎え

毎月開催の三合目の植物観察会。6月26日（日）は梅雨とは名ばかりの熱いような日差しの中、初夏の花々を観察できました。ただ、ネット内で株数が増えてきたササユリは見頃が過ぎていて少し残念。うまいこと行かないものです。一方で早くもユウスゲが咲き出しました。今後の日程は8月21日、9月25日です。



キバナノカワラマツバ



キバナノレンリソウ



クマハナ



クサビシ



スズサイヨ



ユウスゲ



ウツグサ



イビキトノオ



ノアザミ



タコトウダイ



カラマツゾウ



コウソリナ

## 伊吹山にも侵入！外来園芸種ジギタリスを駆除しました。

ジギタリスは、欧州原産で園芸種として流通していますが、自然界にも広がる例が見られ、一つの実に数千個の種をつけるなど繁殖力が強いので在来種を駆逐するなど生態系を脅かすおそれがあります。全草有毒で鹿も食べません。このため県内外で駆除が進められ最近では高島市朽木でも実施されました。今年6月伊吹山中腹でも群生が初めて確認され、市担当部局に確認の上、根こそぎ除去を実施し可燃ゴミ袋に入れて処分しました。



ジギタリス群落



別名キツネノテブクロ。長さ5cm以上もある大型の赤紫色の花が穂状につき下から順に咲く。



## 連載 牧野富太郎博士と伊吹山 その5

明治39年（1906）8月10日に、春照小学校で開催された坂田郡教育会の伊吹植物講習会について紹介します。牧野富太郎を講師にして2府18県という広範囲から伊吹山麓に人々が集まった盛大な講習会で、富太郎も「講習員は約三百名もあった」と回想しています。教育会は、富太郎滞り期間中に直接指導を受けた植物調査の結果、コケやシダを含む731種の植物を分類し『坂田郡志』に掲載しました。その後も多くの植物が発見され、伊吹山中腹や山麓の上野国民学校には薬草園が設置され研究の資料を提供しました。講習会の集合写真をのこした上野の堀與曾市氏も参加して富太郎から直接指導を受け、尋常高等小学校の教員をしながら、これらの調査研究の中心を担ったようで、多くの植物標本を残しています。余談ですが、富太郎に野草の名前を尋ねると「そもそもこの種は…」とはじまってなかなか説明が終わらなかったといわれています。西登山道の岩場で見つけた新種のイネ植物に「イブキソモソモ」の名がつけられたというエピソードが伝えられています。



堀與曾市植物標本

## 衰退する中腹の生態系

伊吹山中腹は二ホンジカの食害のため多様な植生は失われ、シカの被食でコントロールされた極めて貧相で単純化された植生になり果てています。



シカの不嗜好植物のみ群生。左からイブキジャコウソウ、コクサギ、タケニグサ、オオヒナノウスツボ

ユウスゲと貴重植物を守り育てる会

会長 高橋滝治郎  
副会長 堀江 寛

TEL 090-3286-8191  
TEL 0749-58-1323